



Title	砂漠と内面：カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽
Author(s)	片井，優花
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 54-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79348
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

砂漠と内面

—カーリン・ボイエ『カロカイン』における「有機的なもの」の萌芽—

文学環境論 修士課程2年

片井 優花

はじめに

本発表ではカーリン・ボイエ著『カロカイン』（1940）における「砂漠」というモチーフに注目し、この観点から作品に解釈を提示することを目指す。カーリン・ボイエ（Karin Boye, 1900–1941）はスウェーデンを代表するモダニズム期の詩人・小説家であり、『カロカイン』は彼女の小説作品の代表作として位置づけられる。本作は多層的なメタファーによって構成されており、そのなかでは彼女が多用することで知られている植物のモチーフも中心的な役割を担っている。これは「砂漠」というモチーフと併用されることでより一層効果的になっていると考えられ、したがって本発表では、先行研究では大きく取り上げられてこなかった「砂漠」を解釈の切り口とする。

『カロカイン』はディストピア小説として知られており、全体主義・管理主義的な国家、〈世界国家〉を物語の舞台とする。ここでは〈国家〉という共同体に奉仕すること以外に個人の存在意義は認められておらず、個人はその内面に至るまで、〈国家〉に忠誠を尽くさなければならない。また、国民たちは互いを疑い、監視しあうことが求められている。しかし一方で、作中にて個人はすでに完璧に〈国家〉に支配されているのかというと決してそうではない。恐怖ゆえに表立って表現されることはないものの、個人のなかにはいまだ〈国家〉に支配されない私的な思考や感情が残っている。この存在を意図せず明らかにしたのが、科学者である主人公レオ・カールが開発した薬「カロカイン」だった。

ところで作中には、〈砂漠の街〉という場所についての伝説が登場する。〈国家〉の支配の及ばない場所にあるとされるこの街は、その地上は有毒物質に汚染され、瓦礫だらけの廃墟と化しているものの、地中には清らかな水と土壌があるのだという。本発表ではこの〈砂漠の街〉の地上に広がる砂漠が〈国家〉の、地下に配置された空間が個人の自由な内面の象徴となっていることを指摘し、その上でカロカインという薬が〈国家〉という砂漠に「有機的なもの」、すなわち個人の私的な思考や感情を発芽させ・進展させ・繁茂させていく希望を導くものであることを論じていく。

1. 〈砂漠の街〉の地上と地下

先述の通り、〈砂漠の街〉は伝説上の街である。レオはこの街についての伝承を侮蔑しながらも、その一方で強く魅了され、繰り返し夢に見るようになる。その夢においてレオは〈砂漠の街〉の汚染された地表において、「この道の終点にたどりつけるかどうか」、

自分の命運がかかっている」(188)と考えながら一本の道を歩んでいた。しかしその道の途中で立ち往生してしまう。そのとき、ある女性が地下室の入口で手招きしているのを見、「屋根のない荒れはてた石の部屋」(190)へと逃げ込む。そこは頭上に草花が揺れ、土の床には泉の水が流れる地下室だった。レオはこの地下室を「安全な隠れ家」(190)と表現し、大きな安らぎを得る。以下ではこのレオの夢に注目し、〈砂漠の街〉の地表にある「砂漠」と地下にある「地下室」がそれぞれ何を表象しているのか考察していく。

なぜレオは夢の中で砂漠を歩いていて、なぜ地下室に安らぎを得たのか。これを考えるにあたって、まずは作中で「砂漠をさまよう」という比喩が使われている箇所を参照したい。ある女性がカロカインの実証実験の被験者になった場面である。彼女は自身の夫がスパイ計画(実はこれは実験のためにでっち上げられたものである)を抱えていることを知りながら、それを告発しなかったために研究室へと連行され、カロカインを注射される。しかし予想に反し、カロカインを投与された途端、彼女は全身から安らぎを発しながら夫に感謝しはじめる。スパイ計画という大きな秘密を、告発される危険も顧みずに打ち明けてくれた夫の「勇敢さ」(78)に彼女は感動したのである。とはいえ、彼女のこの様子はカロカインの効き目が切れるとともに一変する。途端に恐慌状態に陥る彼女を見て、〈国家〉に忠実な兵士であるレオは彼女を軽蔑的に描写する。

わたしは^{フアータ・モルガナ}蜃気楼のことを思いだした。砂漠をさまようひとが、塩湖の向こうにみる幻だ。ヤシの樹、オアシス、泉。悪くすると、そのひとは膝をかがめて塩の池に口をつけ、そして命を落とす。彼女もおなじことをしたのだと思った。反社会的で、個人主義的感傷に満ちた泉から、わたしたちがすすめる飲みものは、いつの世も変わらない。幻想、それも危険な幻想である。(拙訳、原典 63) (傍線は発表者)

夫に対して「反社会的」——すなわち反〈国家〉的——な感情を抱いてきた彼女は、ようやく「反社会的で、個人主義的感傷に満ちた泉」から癒しを得られると信じてそれに口をつける。ここからは、「砂漠」が〈世界国家〉のメタファーとなっていること、被験者の女性はこの〈国家〉において自らの夫との個人的なつながりを追い求めており、それが「砂漠をさまよう」という言葉で喩えられていることがわかる。〈国家〉は個人に対し、その内面に至るまですべてを〈国家〉に捧げることを求めるが、この個人の私的な内面が許容されない社会が、「水」のない「砂漠」に重ねあわされているのである。

レオもまた、この被験者の女性と同様に「砂漠をさまようひと」だったと言える。彼は長年、妻リンダがいつか自分の「盟友になってくれるかもしれない」(194)という、〈国家〉の規範にもとる願望を抱き続けていた。夢のなかで〈砂漠の街〉の地表を歩くレオもまた、他者との個人的・精神的なつながりを追い求めていたと考えられる。

一方で地下室へと逃げこんだレオは、砂漠での苦悩から解放される。つまりレオはここで〈国家〉から「救われ」(190)た。この空間には、個人にその内面まで共同体へと擲つことを求めるような〈国家〉の規範は届かない。それゆえようやくここで、レオは「他

者との個人的なつながりを求める」という自らの欲求——〈国家〉に縛られない自由な内面——を肯定することが可能になる。地下室には「きよらかな泉の水」(190)が湧き出しているとされるが、〈国家〉の支配が及ばないこの空間には、ひそかに自由な思考や感情が湧き出し続けているのである。そしてこの思考や感情からは、まるで植物のように言語や行為が育まれていく。〈砂漠の街〉の地下室は〈国家〉の支配が届かない場であり、個人の自由で私的な内面を表象している。

2. 内面を萌芽させるカロカイン

〈砂漠の街〉の地表に広がる「砂漠」が〈国家〉を、「地下室」が個人の内面を表象するというこの構図において、地下に抑圧されている内面を地表へと表出させるものが、真実薬「カロカイン」である。カロカインは、それを注射することで「どんな人間にも秘密を吐きださせる媒体」(13)である。レオはこれを、個人の内面にまで〈国家〉の統制を広げることが可能にし、「〈国家〉の安全」(15)をもたらすものとして開発した。しかしこの薬は次第に、大多数の国民の内側には反〈国家〉的な思考や感情が潜んでいることを明らかにし、そして彼らの語りはそれを聞くレオにも影響を与えていく。〈国家〉は管理・統制することを目的として個人の内面を強制的に発現させようとするが、一度語られ始めた内面は、〈国家〉の体制をゆるがしはじめるのである。

またカロカインは、自由な意志による語りを生みだすきっかけにもなっていく。たとえばレオの妻であるリンダは一度カロカインを注射され強制的に内面を告白させられたあと、「恥ずかしさで死んでしまうか、つぎは自分の意志で語りつづけるか、そのどちらか」(213)であることを理解する。彼女は自らの意志でレオに自分の内面を語り、これによりふたりはお互いを理解しあい、結びあわされることとなる。

さらにリンダは、自分やレオと同様に〈国家〉に縛られない自由な内面や個人同士のつながりの存在に気付いている人々、すなわち「〈母〉であるようなひとたち」(225)を探し出し、自由な意志による語りを連鎖させていくことを目指す。少しずつ仲間を増やし、「あたらしい世界」(225)を作っていこうとリンダは考えるのである。

3. 植物と未来への希望

個人の私的な思考や感情は、カロカインによって言語という形で発現し、ときに自由な意志による語りを誘発して、〈国家〉の当初の思惑をこえて広がっていく兆しを見せる。このことは、特に植物のモチーフを用いて作中に表現されている。

先述の通り、〈砂漠の街〉においてはその地中にきれいな水や草花、「地下室」があり、一方その地表には汚染された瓦礫だらけの空間が広がっているとされる。地中に有機的なもの、地表に無機的なものが配置されているのである。この構図は、作中で登場人物が用いる植物のメタファーと重ね合わせることが可能である。物語終盤において、リンダは出産を「未知の奥深いところから、樹液がのぼってくる」(220)と喩える。一方で、

レオの上司リッセンは「たったひとつでいい、健全のささやかな残滓がどこかに隠されていて、やがては芽をふき<権力の装甲車>を突きやぶってこないものか。」(234)と語る。リンダ・リッセン両者に共通するのは地中から芽生え地上に伸びるという植物のイメージであり、これによってふたりは人間の奥底にひそむ生命力への希望を表現している。植物の根や種は地中に存在しており、人間の目に触れることはないが、この地中を人間の深層ととらえた上で、生命がそこから生じて表層に現れてくるというイメージが内包されているのだろう。これを<砂漠の街>の構造と重ね合わせると、<砂漠の街>の地下室に眠っている個人の内面が、いつの日か成長し、無機質な砂漠へと生え出てくるという可能性をも読み取ることができる。地下室にある「水」、すなわち尽きることのない個人の思考や感情は、言葉という形で<国家>という砂漠に芽生え出るのである。

地表に芽生えた植物は、それを摘み取ろうとする<国家>の手を逃れて、次第にその領域を拡大していく。自らの意志による語りは、次第に連鎖し個人を結び合わせていくのである。これは、地表に芽生えた植物が成長しその枝葉を広げていくようなイメージでとらえることが可能だろう。作中では、ある女性が以下のように語る。

「われらは組織など求めない。^{オルガニスム}有機的なものは^{オルガニゼラ}組織化の必要がない。あなたがたは外側から築くが、われらは内側から築く。(中略)われらは樹木のように築かれる。それは育って、われらをつなぐ橋となる。」(120)

この女性の言葉のように、「あたらしい世界」は成長力を持ち、時間的な広がりの中に構築されていく。自律的な「有機体」(organism)である「あたらしい世界」は、外部から無機的に構築された「組織」(120) (organisation)とは異なり、「育つ」ことが可能なのである。ここにおいて植物のモチーフは、未来への希望を提示している。

おわりに

以上の考察を通して、「砂漠」というモチーフが本作の舞台たるディストピアを象徴していること、またその一方でその地下にある空間は決して絶えることのない個人の私的な思考や感情を象徴し、水や植物と結び付けられて未来への希望をも内包していることが導かれた。個人の私的な内面は、言語という形で植物のように有機的に成長し、次第に「あたらしい世界」を形成していく兆しを示す。このとき「カロカイン」はこの砂漠の地表に緑を芽生えさせる役割を担っており、<国家>という絶望的な環境を克服していく可能性を提示するのである。

引用文献

Boye, Karin. *Kallocain: Roman från 2000-talet*. Bredefeldt förlag, 2016.

ボイエ・カリン『カロカイン——国家と密告の自白剤』。富原眞弓訳、みすず書房、2008。